札幌市方言アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査
～老年層話者の「生涯変化」に着目して～

高　野　照　司
Shoji TAKANO

目次

1．本研究の背景
2．「生涯変化」をめぐる議論
3．本調査の概要
　3.1　調査地
　3.2　調査対象者
　3.3　調査方法
　3.4　分析結果
4．考察：生涯変化の社会的意味
5．おわりに

［Abstract］
A Real-time Panel Study of Standardization of Lexical Accents in Sapporo Japanese: Focusing on Lifespan Changes in the Speech of Older Generations

Real-time studies of linguistic change are relatively scarce in the framework of sociolinguistics. An absolute majority of past studies are built on the apparent-time construct in which one's vernacular is hypothesized to be unchangeable once acquired during the adolescent years. More recently, rigorous attempts have been made in the observations of the same individuals over time (i.e., panel sample), and have reached rather conflicting generalizations. This paper aims to contribute to the resolution of those conflicting views by providing real-time panel samples from Sapporo Japanese, which has undergone a massive degree of standardization. The paper focuses on the prosodic domain (lexical accents), which has been understudied in real-time investigation of linguistic change in the past. Based on 146 identical sentences read aloud by 17 Sapporo Japanese informants in their 60s and 70s, who have been recorded twice in 1990 and 2011, the results demonstrate that among the vast majority of informants their lexical accents remain stable even after a quarter century has passed, and that linguistic constraints continue to exert uniform influences on their idiolects over time. The paper also discusses a few "outliers" with higher degrees of lifespan accent changes towards Standard Japanese, referring to such social factors as contact with other dialects, language attitudes and ideologies, and communication networks.

1．本研究の背景

本稿は，筆者が2010年秋より着手している札幌市方言アクセントの共通語化に関する「実時間パネル調査」[1]の概要を説明し，現在までにまとまっている成果の一部を公開することを目的とする[2]。

「共通語化」を主な射程とした札幌市方言のバリエーションや変化に関する大規模で組織的な検証は，札幌市山鼻地区で行われた小野（1991, 1993［調査実施は1990年暮れ］）を最後に今日まで途絶えてしまっている。それまでいくつもの先行研究により指摘された札幌（および北海道各地）における共通語化の急速な進展は，それからほぼ四半世紀の時を経た今，どのような様相を呈しているのだろうか。従来の（とりわけ海外での）言語変化研究の主流は，現時点で観察される世代差を過去から現在にかけて生じた変化の投影と見なす「見かけ上の時間」解釈に基づいている（Chambers & Trudgill 1998）。しかし，この解釈のみに立脚する研究アプローチの大きな弱点は，その世代間較差が単に各年齢層に特有の言語特徴（例えば，若者の流行りこと

キーワード：生涯変化，共通語化，語彙アクセント，札幌市方言，言語変異の社会的意味
Key words: Lifespan Change, Standardization, Lexical Accents, Sapporo Japanese, Social Meanings of Linguistic Variation

ば）を反映する「年齢傾斜」であるのか，あるいは，比較的若い世代の言語特徴が将来も生き残り，その地域社会全体に拡散するであろう「言語変化」と言えるのかを見極める術を持たないことである。時間と手間はかかるものの，言語変化を捉えるためのより信頼性の高いアプローチは，一定の時を経た後，同一地域社会を再度調査する「実時間（経年的）研究」であることは言うまでもない。また，実時間研究は，言語変化研究の中心的課題である変化原因（なぜ変化が起こったのか）やその背景となる話者意識の問題，変化の中心勢力の分布や変化速度など変化プロセス（どのように変化したのか）などへの洞察に極めて有益な情報を与えてくれる（ロング他2001）。

北海道方言変化の先行調査を見渡すと，北海道各地で共通語化の進展がおしなべて確認されている一方で，共通語化への参与における個人差や地域の内部差が，北海道で方言調査が行われた比較的初期の段階から指摘されてきたことが分かる（池上他1977など）。北海道における言語形成は，移住形態の地域間較差（一地域からの均質的集団移住か，複数地域からの混在的移住か）から内部差が大きい。また，入植者方言から徐々に脱皮し独自の北海道方言を作り上げてきた３世や４世においては，地域社会との結びつきや日常生活におけるコミュニケーション形態など，同じ方言区画内であっても話者により社会生活の実態が異なり，それと関連して共通語化においても顕著な個人差が認められる（小野1981）。

本実時間パネル調査では，見かけ上の時間解釈に基づいて先行研究が示してきた札幌市方言の変化予測（共通語化）に関して経年的に追跡調査を行い，その変化予測の妥当性を実時間により検証してみることが主なねらいである。その際，集団語主体の従来的アプローチから少し視点を変え，共通語化の渦中に身を置く地域住民（話者）の「個人語」の経年的変容を調査の力点とする。また，その社会的背景として，各住民の生活経験や地域社会との関与，他方言との接触やコミュニケーション形態など社会生活面での経年的変化，そして，個人ごとに異なる方言意識や標準語意識などを含めた言語イデオロギーをフィールド調査を通して質的に捉え，個人語の変容との関連性について考察を行うことも視野に入れている。

具体的には，1990年の暮れに札幌市山鼻地区で行われた先行研究（小野1991, 1993）の調査協力者（札幌方言生え抜き話者）から，当時と同一の調査票を用いた文章読み上げタスクによる音声資料を収集し，約20年間で各話者の個人語がどのように変容した（あるいは，しなかった）のか，変容したとすればその動機付けとしてどのような社会的要因が考え得るのか等を検証していく。このような試みは，より高度な説明能力を持つ理論の構築に向け幾ばくかの貢献ができるという点で学術的にも重要な意義を持つと考えられる。

２．「生涯変化」をめぐる議論

そもそも言語変化の「見かけ上の時間」的解釈は，「個人語は一生涯不変」，即ち，各世代の構成員一人一人の言語は言語形成期（おおよそ15歳くらいまで）以降，時を経ても変化しない安定した体系であるという大前提に依拠している（Chambers 2009）。しかし，近年の海外の研究動向を見ると，実時間研究の重要性を再認識し，「個人語不変」の前提を敢えて検証する研究が増えてきている。その結果，個人語は人生経験や社会変動を経て変化しうるという「生涯変化」の可能性を指摘する研究が少なからずある（Kerswill & Williams 2000; Sankoff & Blondeau 2007; 横山2010; 横山・真田2010など）。

一方，個人語の不変性を言語領域によって

異なるものとみなし，限定的に捉える立場もある。一般に，個人語の語彙については，職業を中心とした様々な生活体験を通して変わりやすいが，音声面は変わりにくいとされ，特に本研究の調査対象である名詞アクセントのような韻律的側面は，分節音に比べ生涯変化しにくいことが指摘されている（Chambers 2009）。

日本国内に目を向けると，国立国語研究所（以下，国研と略す）の鶴岡調査（国研1953, 1974, 1994, 2007）をはじめ古くから実時間研究が盛んに行われてきており，日本の社会言語学（特に方言学）は「実時間研究の宝庫」と言っても過言ではない。北海道方言を例にとると，27年の時を経て富良野市で行われた実時間パネル調査（国研1965［1959年調査実施］, 国研1997［1986年調査実施］）があるが，確かに言語領域ごとに特徴的な生涯変化の実態が見て取れる。

例えば，語彙項目においては，「安定型」の項目（シバレル，ハク）は全く変化を示さない一方，「微減型」（トーキビ，カッチャク，ユルクナイ）や「急激衰退型」（ゴショイモ，カテル）と言える項目などがあり，共通語化へ向けた生涯変化は語彙種により異なる進度を示す。分節音については，1965年の初回調査時点ですでに高い割合で共通語化が進んでいたため比較しにくいが，ほとんどの項目（[i] [e]の区別など）で微増が見られる一方，ガ行子音の鼻音化（「釘」「中学」「道具」など）については，どの年齢層でも初回調査と再調査間で大きな食い違いは見られなく，25年の時を経てもほとんど変わっていない（国研1997）。しかし，上述の国研鶴岡調査における約40年間のパネル調査資料の分析からは，個人語が加齢とともに共通語化へ向かうのではなく，むしろ方言化するという他言語相からは逆行する生涯変化が確認されている（横山2010）。

一方，一般に最も生涯変化しにくいと言われる韻律面においては，「主人」（シュジ’ン，共通語型は「シュ’ジン」），「火箸」（ヒバ’シ，共通語型は「ヒ’バシ」），窓（マド’，共通語型はマ’ド）などの名詞アクセントは，どれも話者の加齢とともに共通語型への変化を起こしているとされ（国研1997），意外にも「個人語は一生涯不変」とする一般化とは相反する結果が示されている。他にも横山・真田（2010）では，鶴岡市における過去３度（1950年・1971年・1991年）の実時間調査資料（語彙アクセント５項目）による共通語化の予測モデルの提案のなかで，「見かけ上の時間」調査のみによる変化予測を上回る程度の共通語化の進行を説明する要因として被験者の生年および調査年が統計学的に特定できることから，生涯変化の介在が強く示唆されている。さらに横山（2010）では，当該調査項目のパネル資料の吟味からも共通語化へ向けた個人語の生涯変化が確認されている。

経年的パネル調査に基づく検証が不可欠となる「生涯変化」の研究は全般的に不足しており，上述の研究成果も含めて，分析結果は地域社会（例えば，日本国内対海外）や言語領域ごとにまちまちで一貫性を欠く部分が少なくない。今後はより多くの地域社会で様々な領域（語彙・文法・音声面）にわたる検証が必要とされる。

３．本調査の概要

本稿では，札幌市山鼻地区における札幌市方言音声の共通語化調査（小野1991, 1993）を先行研究とする経年的パネル調査の概要を説明するとともに，これまでに得られた研究成果の一部を公開する。以下，調査地としての山鼻の地域特性，調査対象者，調査方法，及び分析結果の順に記載していく。

3.1　調査地：札幌市中央区山鼻地区　20年前と今

北海道では1871年，開拓史による本格的都市作りが開始された。1876年 山鼻村に屯田兵が入植し，札幌最古の屯田兵村が山鼻に誕生。1910年札幌村，苗穂村，上白石村，豊平村，山鼻村の各一部が，札幌区に編入され，このうち苗穂村の一部と山鼻村の全域は，現在の中央区に含まれることになった。

現在でも屯田兵にまつわる歴史は受け継がれ，「屯田兵資料館」，「屯田兵子孫の会」なども存続している。 また，札幌の生え抜きが多く，町内会組織が比較的しっかりしている。かつては北海道教育大学がこの地区にあり，札幌南高（旧制第一中学校），名門中学などのある「文教地区」として落ち着きのある住宅街を成しており，少なくとも1990年当時は，札幌市内で最も「札幌らしい」ところとされた。

今日の山鼻の街並みは大きく変わり，マンションが乱立。昔ながらの商店街も衰退した。そのような地域変化の反映として，山鼻の生え抜き住民からは，今回の調査を通して以下のような声がしばしば聞かれた。

- 街の様変わり
  「子供がいなくなった」「昔は町内会の皆でお祭りや運動会を頻繁にやったが今は難しい状況」
  「年寄りばかりが増えて若い人は皆出て行った」「独居老人が増えている」
  「昔の古い一軒家があちこち空き地になっている」
- 町内会組織の衰退
  「昔の町内会組織が成り立たなくなっている。いつも同じ顔ぶれ（昔からの顔なじみ）が会合に出てくるので盛り上がりに欠ける。若い世代への組織拡張が課題」
  「今も付き合っている人は自宅付近の数軒のお宅のみ。新しいマンションの住民とはほとんど付き合いはない」
  「マンション住民は町内会活動に加わらない」

しかし一方で，特にここ５～10年くらいは若い世代のＵターン現象も起きていると聞く。就職や結婚などでいったんは親元を離れた子供世代が，年老いた親と同居する，または面倒を見るため一家で山鼻へ戻ってくる。さらには，「落ち着いたいい学校が多い」という文教地区としてのイメージは今日でも根強く，札幌市内の他区から一軒家やマンションを購入して引っ越してくる人々も少なくはないようである。

3.2　調査対象者

先行調査（小野1991, 1993）での話者の内訳（男女半数ずつ）は，以下のようになっている。どの話者も札幌市生え抜きとされる。

小学５年生20名，中学２年生20名，20代16名，30代16名，40代16名，50代17名，60代16名，70代15名，計128名（８名欠席）

札幌市立柏中学校，札幌市立幌南小学校を会場に二日間にわたって，調査票を用いた面接調査が行われた（調査票は小野1991, 41～59頁に掲載）。調査票は，話者による読み上げを主体とし，単音節，単独文読み上げ，長文朗読などから構成されている。そのうち，１～４拍名詞に関するアクセント型の分析結果が公表されている（小野1993, 59～86頁）。

先行調査から20年後となる本パネル調査では，1990年当時の60歳代と70歳代の山鼻住民を除く97名を調査対象とした。（ただし，中学生20名については氏名のみでの把握のため，現在のところ捜索は難しい状況にある。）

2014年４月現在での調査状況は以下のとおりである。

- ➢70代（当時50代）話者９名［男３・女６］
- ➢60代（当時40代）話者８名［男４・女４］
- ➢50代（当時30代）話者６名［男３・女３］
- ➢40代（当時20代）話者５名［男２・女３］
- ➢30代（当時小・中学生）女性話者１名

計29名

※辞退・不明・死亡・転居などで17名（70代）中７名・15名（60代）中７名・16名（50代）中７名，合計21名が収集不能。今年度にかけ，40代・30代話者の調査を完了する予定。

本論考では，調査が完了している60～70歳代（前回調査時40～50代）話者17名についての分析結果を報告する。その他の話者については，今後も調査を継続する予定である30～50代（前回調査時10～30代）の話者と併せて，別に公表の機会を設けたい。

3.3　調査方法

先行研究（小野1991, 1993）の調査票を中心に，各話者から面接による音声を収集させてもらった。ただし，母音発音項目など一部は割愛し，他の先行研究（国研1965, 1997; 尾崎1986, 1989）で調査された語彙も追加するなどして新たな調査票を作成した。

また，面接では，読み上げタスクによる音声収集の他に，20年間での生活上の変化，山鼻地区の変化，方言・標準語意識，趣味や習い事，町内会活動などを含めた日常生活の様子など様々な話題を挙げ話をしてもらい，各話者の「日常語」にできるだけ近い語り音声の収集も併せて行った（Labov 2006）。

3.4　分析結果

今回，分析対象としたのは，先行調査（小野1993）で公表されているのと同一の名詞で，１拍名詞が15項目，２拍名詞が60項目，３拍名詞が46項目，４拍名詞が25項目，合計146項目である。各拍名詞のアクセント型の内訳と代表例については表１にまとめた。

小野（1993）と同様に，各話者の「共通語化」の度合いを点数制（ただし，本稿では得点割合）で測定した。共通語的アクセント型で発音された項目には１点，そうではない項目には０点，複数回発音された項目にはそれらの平均点を付けた。総点は146点（100％）となる。当然のことながら，この146項目から各話者の持つ名詞アクセント体系の全容が明らかになるわけでは必ずしもないが，本調査の焦点は「個人語」の経年的変化にあることをここで改めて指摘しておく。

表１　分析対象名詞１～４拍のアクセント類型（共通語型）と具体例

１拍（15項目）	Ⅰ類（○▼）	柄が・血が，など５項目
	Ⅱ類（○▼）	葉が・日が，など３項目
	Ⅲ類（●▽）	絵が・歯が，など７項目
2拍（60項目）	Ⅰ類（○●▼）	鼻が・飴を，など12項目
	Ⅱ類（○●▽）	橋が・紙を，など12項目
	Ⅲ類（○●▽）	花が・髪を，など12項目
	Ⅳ・Ⅴ類広（●○▽）	空が・船が・糸が，など12項目
	Ⅳ・Ⅴ類狭（●○▽）	箸が・松が，など12項目
３拍（46項目）	A型 ○●●▼	机・背中，など21項目
	B型 ○●●▽	毛抜き・力，など７項目
	C型 ○●○▽	小麦・つつじ，など３項目
	D型 ●○○▽	姿・命，など15項目
４拍（25項目）	○●●●▼	そろばん，など
	●○○○▽	挨拶，など
	○●○○▽	果物，など
	○●●○▽	大雨，など
	○●●●▽	弟，など

（小野1993より）

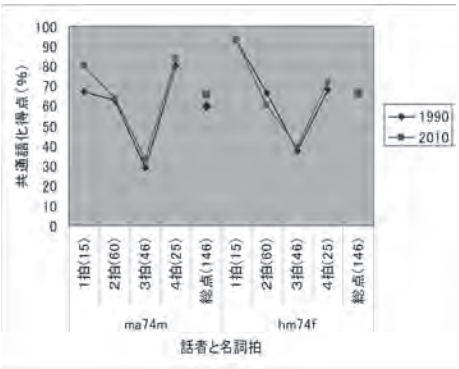
3.4.1　拍数による経年比較

表２では70代話者８名，表３では60代話者９名について，名詞の拍数による共通語的アクセントの産出の割合（％）を1990年調査と本パネル調査（2010年）間で比較した。グラフ１～９では，各被験者ごとの割合（％）を1990年調査と本パネル調査（2010年）間で比較した[3]。総点欄には，各拍ごとの共通語化の割合を平均した数値を入れてある。各グラフには，同じ年齢層に属する男女をペア（男性左側，女性右側）で２名ずつ掲載してある（ただし，グラフ４，５を除く）。話者記号は，氏名のイニシャル・本調査時点での年齢・性別の順である（例　ma74男性：74歳男性話者ma）。

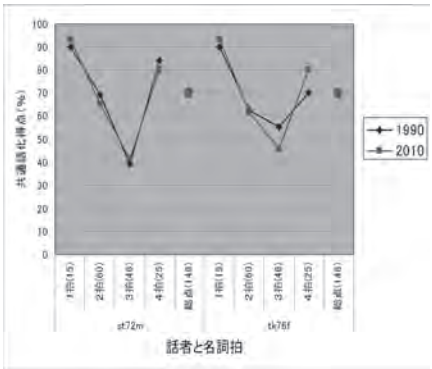
表２・表３内で下線が付与された数値は，全体平均から鑑みて比較的顕著な（３％程度以上）共通語へ向けての経年変化を示し，二重下線が付与された数値は，共通語化とは逆方向への変化，即ち，方言的アクセントへの回帰的変化を示す。グラフ１～９の話者記号

表２　70代（1990年当時50代）話者８名　共通語化指標（割合％）

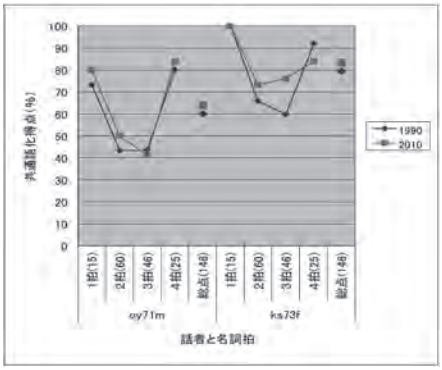
	調査年	１拍名詞	２拍名詞	３拍名詞	４拍名詞	全体平均
男性話者３名	1990	**76.8**	58.5	37.2	81.3	63.5
	2010	**84.4**	59.7	38.5	82.7	66.3
女性話者５名	1990	**90.7**	64.8	**48.0**	78.0	70.4
	2010	**86.6**	64.7	**52.2**	77.6	70.3
全話者８名	1990	85.5	62.5	**43.5**	79.3	67.8
	2010	85.8	62.8	**47.1**	79.5	68.8



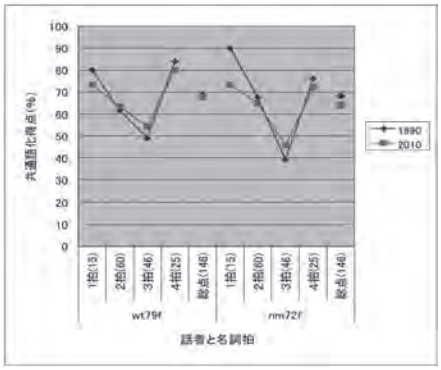
グラフ１：ma74歳男性，hm74歳女性



グラフ２：st72歳男性，tk76歳女性



グラフ３：oy71歳男性，ks73歳女性



グラフ４：wt79歳女性，nm72歳女性

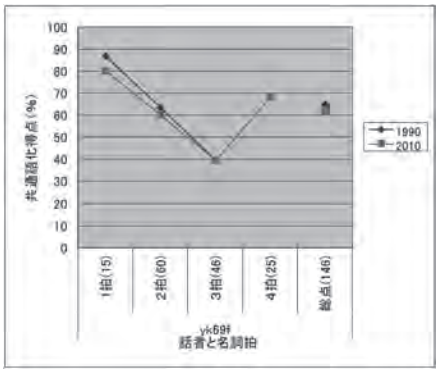
への下線付与も同様の意味を持つ。

まず，総点だけに注目すると，すべての話者において名詞アクセント体系全般を揺るがすような顕著な生涯変化は観察されない（せいぜい数パーセント以内）。つまり，20年程度の歳月では個人のアクセント体系はほとんど変化しないと結論づけることができる。この結果は，特に共通語化に特化して個人のアクセント体系の生涯変化を指摘してきた国内のいくつかの先行研究（国研1997, 横山・真田2010, 横山2010）とは相容れないものとなった。

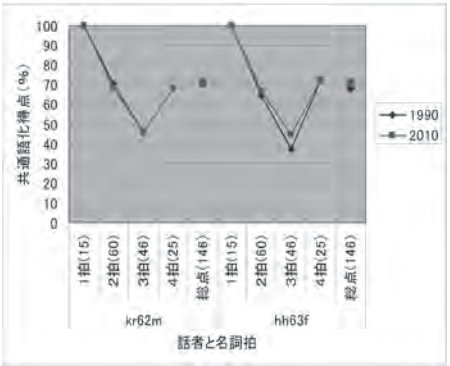
また，グラフ１～９からは，単純に名詞拍数に正比例して共通語化の進度が鈍いというわけではなく，特に２拍名詞・３拍名詞の順に進度が遅れ，１拍・４拍名詞については共通語化が進んでいることが分かる。この「V字パターン」は，話者oh62歳男性（グラフ７）を除き，ほとんどの被験者間で約20年の時を経ても一貫して共有されている。ただし，この点については，４拍名詞の語彙数［25項目］が他拍名詞に比べ少ないこと，５拍以上の名詞が未処理であることなどからさらなる検証が必要だと思われる。

表３　60代（1990年当時40代）話者９名　共通語化指標（割合）

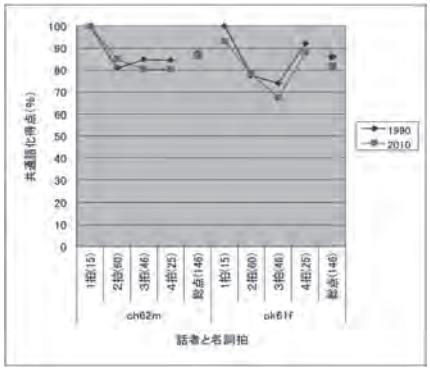
	調査年	１拍名詞	２拍名詞	３拍名詞	４拍名詞	全体平均
男性話者４名	1990	96.7	68.6	53.8	81.9	75.0
	2010-11	96.7	68.3	53.8	80.1	74.8
女性話者５名	1990	**95.9**	**69.5**	55.8	80.4	75.6
	2010-11	**91.8**	**72.6**	57.9	82.0	76.1
全話者９名	1990	96.3	69.1	54.9	80.8	75.3
	2010-11	94.0	70.7	56.1	81.2	75.5



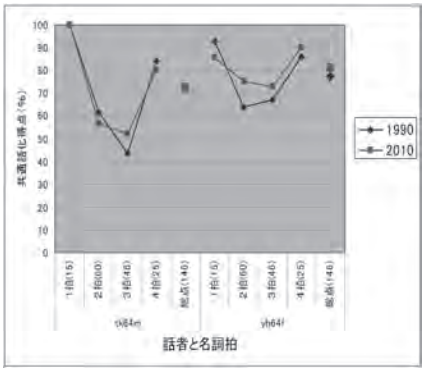
グラフ５：　yk69歳女性



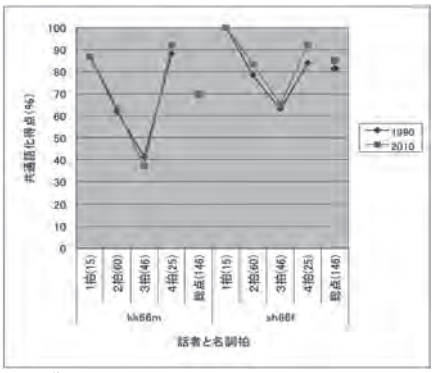
グラフ６：　kr62歳男性，hh63歳女性



グラフ７：　oh62歳男性，ok61歳女性



グラフ８：tk64歳男性，yh64歳女性



グラフ９：kk66歳男性，sh66歳女性

拍数ごとの経年的推移（折線）からも，男性話者７名中３名（グラフ２-st72男性，グラフ６-kr62男性，グラフ９-kk66男性），女性話者10名中３名（グラフ１-hm74女性，グラフ５-yk69女性，グラフ６-hh63女性）については，20年間でほとんど変化していないと言える。女性の標準形志向は，70代話者では若干見られるものの，全般的に性差はほとんどないことから（cf., Trudgill 1972），共通語的アクセントは札幌ではもはや威信形ではなくなった（つまり，非共通語的アクセントが方言的とは認知されなくなった）可能性が高い。

一方，名詞の拍数によっては，極めて小規模ながら「生涯変化」と思われる動きを示す

話者が少なからずいる。しかし，これには必ずしも共通語化へ向けた変化ばかりではなく，共通語とは異方向への変化も含まれている。これは概して，男性話者よりも女性話者に多く見られる。次節以降は，名詞拍数ごとの個人語変化に着目して分析結果を論じる。

3.4.2　１拍名詞における経年比較

先行研究（小野1993）でも指摘されているように，１拍名詞アクセントでは，世代に関わりなく共通語化がかなり進行している。17名中２名（グラフ１-ma74男性，グラフ３-oy71男性）を除き，20年前ですでに８割を越える得点を示しており，その傾向は本パネル調査でも再確認できる。

もともとの分析対象項目数が15と少ないため，割合にすると経年的差異が大きく見えるが，グラフ上で比較的大きな差の確認できる話者が２名いる（グラフ１-ma74男性，グラフ４-nm72女性）。

話者ma（74歳男性，グラフ１）については，Ⅰ類（○▼）の２項目（血が出た，気が重い）において頭高だったアクセントが平板に，Ⅲ類（●▽）の１項目（火が燃える）において平板だったアクセントが頭高に，それぞれ共通語化へ向けた変化を起こしている。しかし，Ⅱ類（○▼）の１項目（葉が散る）については，20年前には共通語アクセントだったものが頭高に発音されるケースも見られた。もう一方の話者nm（72歳女性，グラフ４）における経年的変化は，共通語化とは異なる推移によるものである。Ⅰ類（○▼）の「柄が（長い）」，Ⅱ類（○▼）の「葉が（散る）」がともに頭高（●▽）に，Ⅲ類（●▽）の「火が（燃える）」が平板（○▼）に発音された。

3.4.3　２拍名詞における経年比較

１拍名詞とは異なり，２拍名詞における共通語化の度合いは，1990年の調査時点ではどの話者も共通して低かったことがグラフ１～９でわかる。さらに20年後の本パネル調査では，17名中３名（グラフ３-oy71男性，ks73女性；グラフ８-yh64女性）を除いて経年的差異はほとんど見られない。

尾崎（1986）でも指摘されたように，札幌市方言の共通語化の尺度となりうるのは，第Ⅱ類（北海道方言的○●▼）名詞（橋が・紙を，など）の第Ⅲ類化（○●▽），第Ⅳ・Ⅴ類広母音（北海道方言的○●▽）名詞（空が・船が・糸が，など）の同類狭母音（●○▽）名詞（箸が・松が，など）への合流の有無である（図１）。

グラフ10～18は，２拍名詞の類別に話者ごとの経年的推移を示す。ここでも総点欄には，各拍ごとの共通語化の割合を平均した数値を入れてある。（印刷上，グラフ内に１本線しか現れない部分があるが，これは２調査間で全く差異がなかったことを意味する。）グラフから，共通語化が立ち遅れているのは，Ⅱ類名詞とⅣ・Ⅴ類広母音名詞であり，すべての話者に共有されたパターン（W字）であることがわかる。上記の予測（尾崎1986）と一致する。生涯変化が起きているとすれば，その大半はこれら２グループに属する名詞に関わりがあ

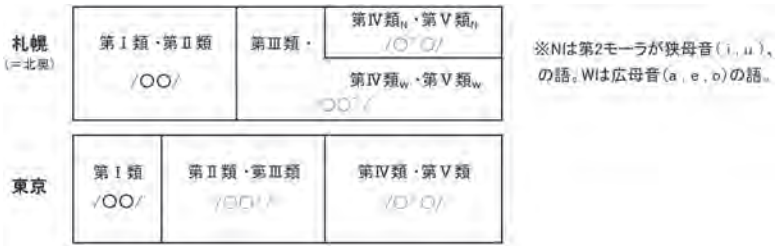
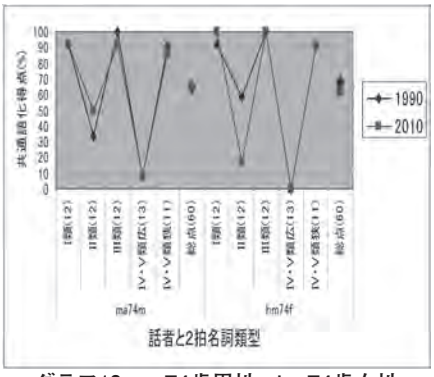
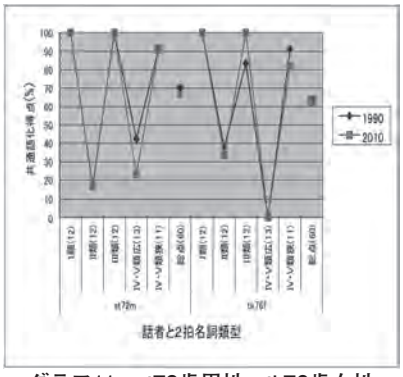


図１　２拍名詞における類別アクセント型：　札幌・東京　　（尾崎1986, 69頁）

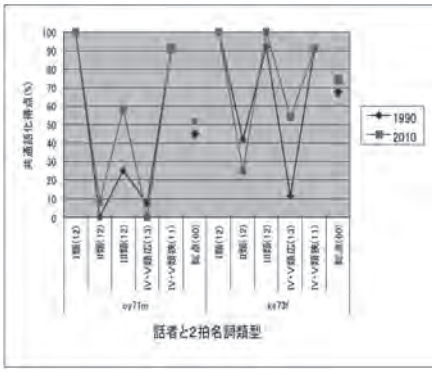
70歳代（1990年当時50歳代）話者



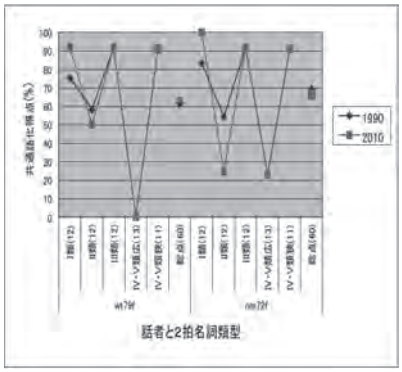
グラフ10: ma74歳男性，hm74歳女性



グラフ11: st72歳男性，tk76歳女性



グラフ12: oy71歳男性，ks73歳女性



グラフ13: wt79歳女性，nm72歳女性

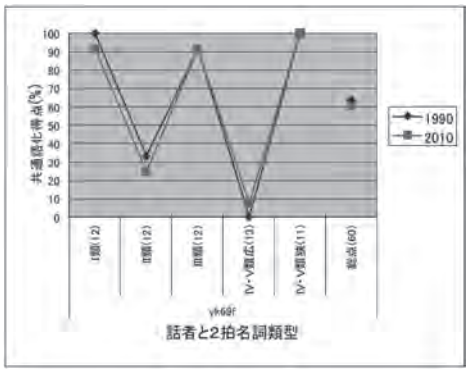
り，共通語アクセントと一致する他の類（Ⅰ・Ⅲ類）に関しては，すべての話者に共通して比較的安定しており，Ⅳ・Ⅴ類狭母音名詞が追従するかたちをとる。即ち，これらの言語内的制約条件には，20年の歳月の後も大きな変革はもたらされていないことになる。

２拍名詞の共通語化へ向けた個人語の変化は，上述の全体的傾向（グラフ１～９）からも明らかなように，特に話者yh（64歳女性，グラフ17）に顕著であり，明らかに当該老年層集団の総体的傾向を逸脱した存在（outlier）と言える。また，話者oy（71歳男性，グラフ12），話者ks（73歳女性，グラフ12），話者oh（62歳男性，グラフ16），話者sh（66歳女性，グラフ18）等も微増ながらそれに続く。

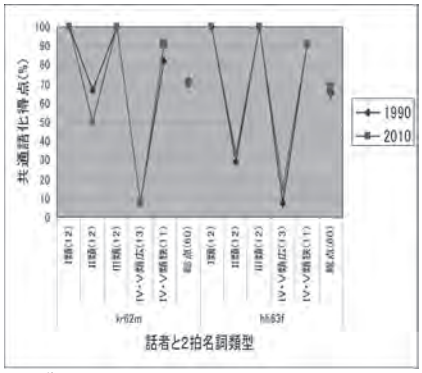
話者yh（64歳女性）においては，Ⅱ類では「橋が」「夏が」「石が」（○●▼）が○●▽に変化，Ⅳ・Ⅴ類広母音項目では，「空が」「種が」「雨が」「蜘蛛が」（○●▽）などが●○▽に変化している。話者sh（66歳女性）においては，Ⅱ類では「橋が」「石が」，Ⅳ・Ⅴ類広母音項目では，「種が」「井戸を」が話者yhと同様の変化パターンを示す。話者ks（73歳女性）は，特にⅣ・Ⅴ類広母音項目の共通語化が顕著で上記の話者yhと同様の変化パターンを示す。話者oh（62歳男性）も，Ⅱ類では「冬が」「紙が」「旗が」が，Ⅳ・Ⅴ類広母音項目では「鎌が」「板が」「汗が」などが上記yhと同様のパターンから共通語アクセントに変わった。話者oy（71歳男性）はこれらの話者とは異なり，Ⅲ類名詞（犬が，色が，雲が，草が，波が）で平板（○●▼）から中高（○●▽）への変化が特徴的である。やはり共通語化における個人差はここでも明らかである。

一方，グラフ10～18からは，共通語化とは逆行する経年的推移も観察される。1990年

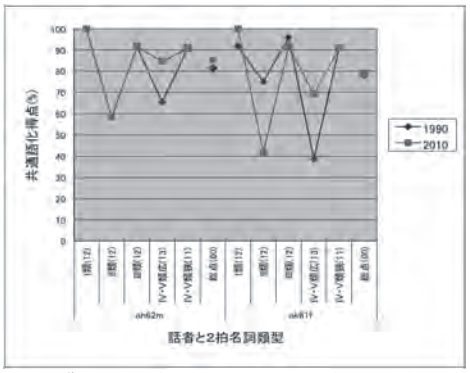
60歳代（1990年当時40歳代）話者



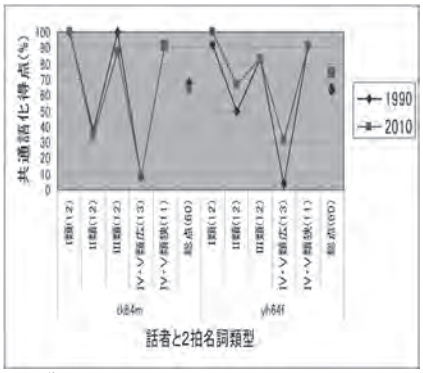
グラフ14:　yk69歳女性



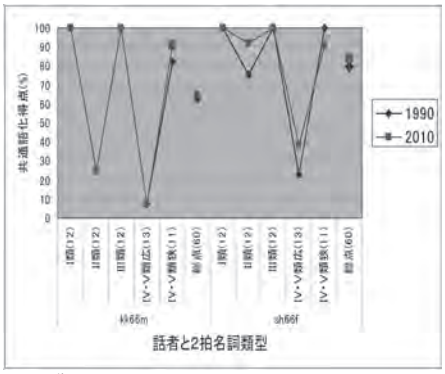
グラフ15:　kr62歳男性, hh63歳女性



グラフ16:　oh62歳男性, ok61歳女性



グラフ17:　tk64歳男性，yh64歳女性

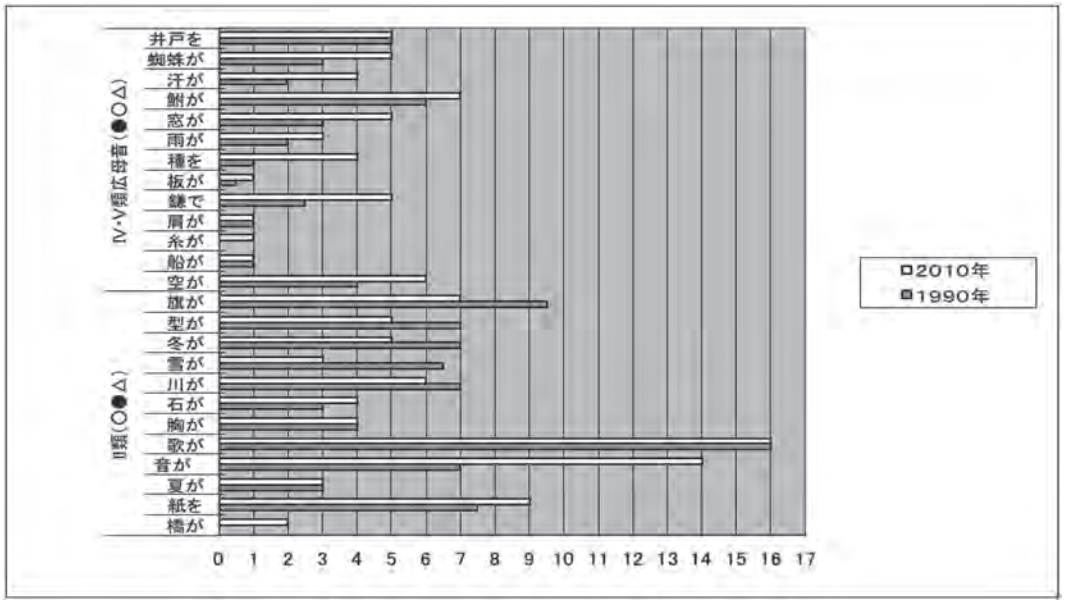


グラフ18:　kk66歳男性，sh66歳女性

調査では共通語的であったものから，2010年調査で北海道方言的アクセントに回帰していることによる。最も顕著な差異は，話者hm（74歳女性，グラフ10）のⅡ類で起きている。これは,「紙を」「夏が」「音が」「川が」「型が」など共通語的アクセントだったもの（○●▽）を，北海道方言的な平板式（○●▼）に発音したためである。これらの反共通語的生涯変化は，Ⅱ類名詞（○●▽,「橋が」「石が」など）の平板化（Ⅰ類化○●▼）が圧倒的に多い[4]。

他にも反共通語的生涯変化は，話者st（72歳男性，グラフ11），話者ks（73女性，グラフ12），話者nm（72歳女性，グラフ13），話者kr（62歳男性，グラフ15），話者ok（61歳女性，グラフ16）など比較的多くの話者で確認できる。例えば，話者st72男性は，Ⅳ・Ⅴ類広母音（「種を」「雨が」「汗を」）のⅢ類化（頭高から中高への変化）が見られ，1990年調査時点ではアクセント位置に揺れが大きく，共通語的●○▽と北海道方言的○●▽の両方で複数回発音されていたものが，今回の調査ではどの名詞も一貫して後者で発音された。他に，話者hm74女性・ks73女性・nm72女性・kr62男性・ok61女性については，Ⅱ類のⅠ類化（中高から平板への変化）などである。

グラフ19では，特に共通語化が遅れている



グラフ19　２拍Ⅱ類名詞・Ⅳ/Ⅴ類広母音名詞における共通語的アクセントの使用人数
初回調査（1990年）・再調査（2010年）

Ⅱ類に属する名詞とⅣ・Ⅴ類広母音に属する名詞について共通語的に発音した話者の人数を示した。全員が発音していれば17となる。グラフからは，母音の種類など音声的制約から共通語的に発音される（されない）などといった一貫した規則性は読み取りにくく，純粋に語彙種によるものと言えそうである。共通語へ向けた生涯変化に着目すると，グラフからは特にⅡ類名詞では「音が」，Ⅳ・Ⅴ類広母音名詞では「汗が」「種を」「鎌で」で変化率が大きい。逆に，方言的アクセントへの生涯変化は「雪が」に顕著である。

これらのバリエーションについては，日常生活における当該名詞の使用頻度，日常性・親近感などといった非言語的要因により生涯変化が左右されるのか（あるいはなんら規則性を持たないランダムな事象とみなすべきなのか）等といった観点から，今後さらなる検証が必要とされる[5]。

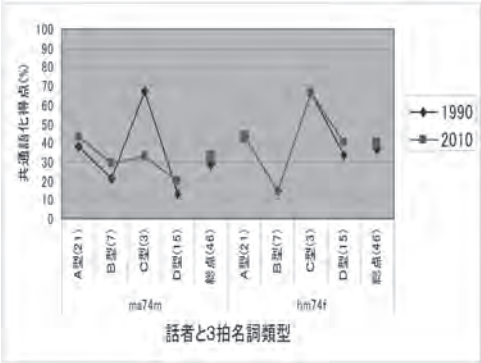
3.4.4　３拍名詞における経年比較

すべての話者に共通して，最も共通語化の遅れている３拍名詞（グラフ１～９参照）は，以下のグラフ20～28のようなアクセント型による変異を示す。前掲表１にならい，Ａ型○●●▼・Ｂ型 ○●●▽・Ｃ型 ○●○▽・Ｄ型 ●○○▽の４分類で示す。アクセント型間の項目数が不均衡なため，総点欄では各型ごとの割合の平均値ではなく，総点（46）に対する得点の割合を示した。

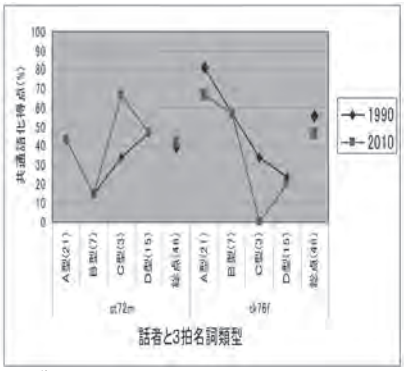
各グラフの総点のみに注目すると，これまでと同様，どの話者においても顕著な経年的変化は見られないが，１拍・２拍名詞の場合とは異なり，３拍名詞では個人差がより大きく広範囲に分散している。アクセント型による分布（折線）に着目しても，17名の話者に共通する規則的パターンはグラフからは即座に読み取りづらいが，便宜的に項目数の少ないＢ型（７項目）・Ｃ型（３項目）を考慮からはずして曲線を眺めると，話者４名st72男性（グラフ21）・話者oh62男性（グラフ26）・話者ok61女性（グラフ26）・話者yh64女性（グラフ27）を除くほとんどの話者で，Ａ型○●●▼がＤ型●○○▽を共通語化で先導しているように見える。

一方，共通語的ではないアクセントについて

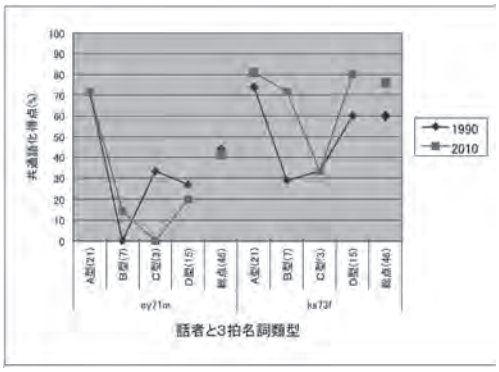
70歳代（1990年当時50歳代）話者



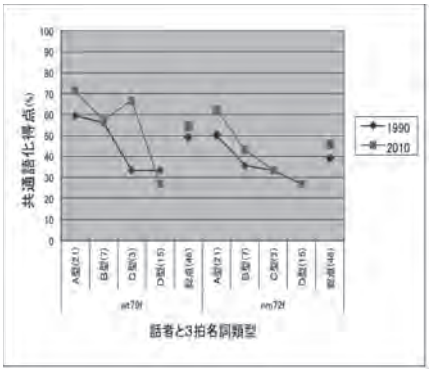
グラフ20: ma74歳男性，hm74歳女性



グラフ21: st72歳男性，tk76歳女性



グラフ22: oy71歳男性，ks73歳女性



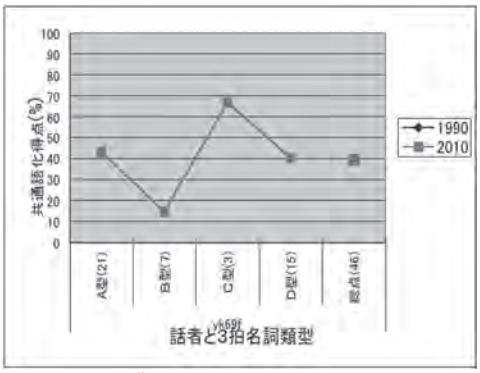
グラフ23: wt79歳女性，nm72歳女性

は，共有されるパターンが見られる。A型○●●▼（机・背中，など）・D型●○○▽（姿・命，など）がともに中高であるC型○●○▽，次いでB型○●●▽で発音されることが圧倒的に多い。共通語化が遅れていると思われるB型○●●▽（毛抜き・力，など）はC型○●○▽で，C型○●○▽（小麦・つつじ，など）はA型○●●▼での発音が大凡のパターンである。

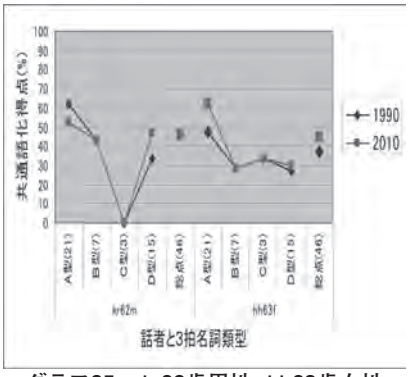
個人語の経年的変化について総点のみから判断すれば，依然規模は小さいが，生涯変化も両方向（共通語化，反共通語化）で見られ，２拍名詞に比べれば規模は若干大きめである[6]。特に動きが顕著なのは，話者ks（73歳女性，グラフ22）で，B型「言葉が」「小豆が」などが方言的C型○●○▽から共通語的（○●●▽）に変化。D型「命が」「涙が」もC型○●○▽から共通語化（●○○▽）した。また，総点では現れないが，話者yh（64歳女性，グラフ27）のA型（○●●▼）の伸びが顕著で，「背中が」「兎が」「薬を」「畑を」（方言的○●○▽）・「後ろを」「着物を」（方言的○●●▽）・「いちごが」（方言的●○○▽）などが，20年後の今回調査では軒並み共通語的（平板式）発音（A型 ○●●▼）になったのは特異なケースと言える。また，話者hh（63歳女性，グラフ25）と話者tk（64歳男性，グラフ27）では，「狐が」「いちごが」「鯨が」など（方言的C型 ○●○▽）が共通語的A型（○●●▼）へと変化した。

一方，反共通語化的生涯変化の主流は，主にB型・C型で起こっている。B型（○●●▽）の「刀」「はさみ」「言葉」などはC型（○●○▽）で，「小豆」がA型（○●●▼）で発音され，C型（○●○▽）の「小麦」「つつじ」がA型（○●●▼）で，「心」がB型（○●●▽）で発音されることが多い。他に特異な

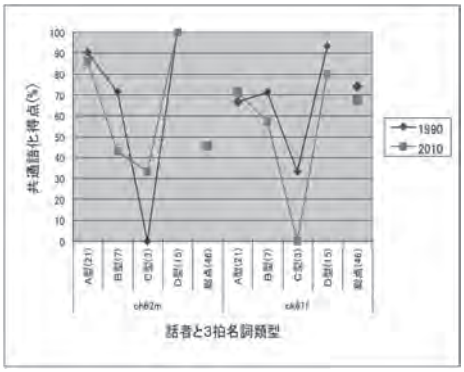
60歳代（1990年当時40歳代）話者



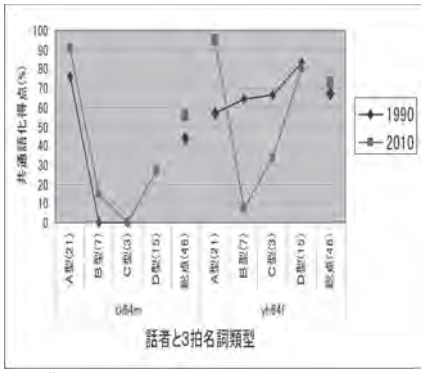
グラフ24:　yk69歳女性



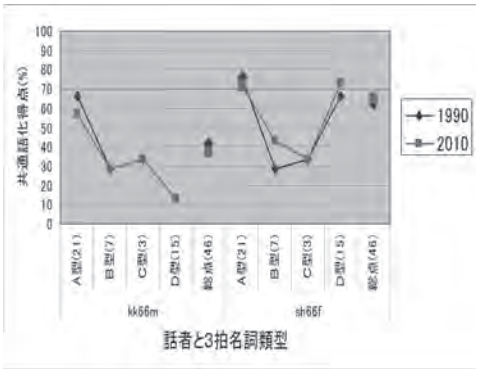
グラフ25:　kr62歳男性，hh63歳女性



グラフ26:　oh62歳男性，ok61歳女性



グラフ27:　tk64歳男性，yh64歳女性



グラフ28:　kk66歳男性，sh66歳女性

ケースとして，A型（○●●▼）「着物」「薬」がB型○●●▽で，「柱」がD型●○○▽なども見られた（例　tk76女性，グラフ21）。

興味深いことに，２拍名詞においても共通語化への生涯変化が顕著であった話者yh（64歳女性，グラフ17）は，項目数の少ない３拍名詞B型・C型においては共通語とは異方向への変化が見られる。同様の現象は，話者tk（76歳女性，グラフ21），話者oy（71歳男性，グラフ22），話者oh（62歳男性，グラフ26），話者ok（61歳女性，グラフ26）などにも当てはまる。これはどの話者においても，B型ないしはC型の項目をA型（平板）で発音していることによる。

3.4.5　４拍名詞における経年比較

４拍名詞の共通語化は，どの話者においても約70％以上の高い割合を示す（グラフ１～９）。共通語的ではないアクセントで代表的な項目は，「オルガンを」「三日月が」（○●●●▼）がそれぞれ●○○○▽・○●○○▽に，「チャンネルを」（●○○○▽）が○●●●▼に，「すずらんが」「二次会が」（○●○○▽）が●○○○▽に，「大雨が」「小刀で」（○●●○▽）が○●●●▼などに発音されている。

数名の話者（tk76女性-グラフ２，yh64女性-グラフ８，sh66女性-グラフ９）において，２～３項目程度，共通語へ向けた経年的変化が見られる。「オルガンを」「チャンネルを」「すずらんが」「大雨が」が主な項目である。

４．考察：生涯変化の社会的意味

60歳・70歳代（前回調査時40・50代）話者のみを分析対象とした本稿では，大多数の話者において「生涯変化」と言えるほどの大規模な経年的変化は確認できなかった。大多数の話者の個人語（ここでは名詞アクセント体系）は，約20年の歳月を経てもそれほど大きく様変わりはしていない。本調査に関する限り，「見かけ上の時間」解釈に基づく言語変化研究の妥当性や言語の諸領域で最も変わりにくいのは韻律面だとする一般化を支持する結果が得られたと言える（cf., 国研1997, 横山・真田2010, 横山2010）。また，先行調査（尾崎1986, 1989）で「共通語的アクセントと方言的アクセントが混在」する世代とされた本調査の被験者の大半は，20年後の今日でも，特に２拍・３拍名詞を中心にその特徴を保持していることも分かった。

一方，生涯変化か否かを判定する計量的基準を設定することは難しいが，個人語の経年的推移を眺めることで，明らかに上記の「主流派」（生涯変化なし）とは異なり一貫して変化を示す話者もいた。特に注目すべきは，話者yh（64歳女性，グラフ８・17・27）と話者ks（73歳女性，グラフ３・12・22）である。

先節3.3でも述べたように，本調査では，調査票による読み上げ音声の収集だけでなく，各話者から「日常語」に近い語り音声を収録させてもらっている。その際，どの話者に対しても一様に以下のような話題を投げかけ話してもらったが，過去約20年における社会生活上の変化が，当事者の自覚の範囲内である程度は把握できた。

「前回調査（1990年）以降，なにか大きく変わったことはありますか」
・住環境や街の様子
・家庭生活や社会生活（特に仕事面）
・趣味や習い事
・人付き合いや近所付き合い
・町内会での役割や町内会活動
・ことば（自分のことば，他者のことば，札幌のことば，方言，標準語）への意識
・他方言との接触

特に話者yh（64歳女性）の語りの中から，他の話者とは特に対照的な「話者特性」がいくつか挙げられる。その一つは，「家庭生活」における「他方言との接触」である。話者yhの配偶者（４年前に死去）は，横浜出身者で「綺麗なことば遣い」（本人談）をいつもしており，「自分も綺麗なことばを使いたい」という願望が常日頃あったという。そのせいか，自分のことば（札幌市方言）は方言だという意識が強く，ことば遣いにはいつも気を付けていたという。一方，他の話者については，話者ma74mと話者tk76fは独身，その他は全員，既婚者（もしくは離婚経験者）で他方言を話す配偶者を持つ（持っていた）話者はいない。

上記と関連し，ことば遣い全般（自分のことば・他者のことば・方言・標準語）への意識や評価，感覚に関わる語りが能弁だったことも話者yhの特筆すべき点である。配偶者の影響からか，標準語は（東京ではなく）横浜界隈のことばだと明言した。（ただし，この言語意識については，東京もしくは関東圏のことばを標準語と捉える話者は他にもいるので，共通語化の個人差の意味を解釈する上で絶対的な指標になるとは言い難い面もある。）

話者yhは，職業を中心とした社会生活の内容においても，とりわけ他の女性話者とは対照的である。高校卒業後，大手銀行の窓口業務に15年間携わり，33歳で配偶者の転職を契機に飲食店を開業（12年前に廃業）。過去20年間での生活上の大きな変化に関する問い

に，飲食店開業と廃業を第一に挙げた。他の女性話者（９名）については，専業主婦が６名（hm74f, ks73f, wt79f, nm72f, yk69f, hh63f），前回調査（1990年）時点でシングルマザーとして常に勤めに出ていた話者（銀行員の後，花屋店員）が１名（sh66f），20代から日本舞踊を教え，前回調査後まもなく喫茶店を開業した話者が１名（tk76f）という内訳である。なかでもこの後者２名は，話者yhほどの規模ではないが，個人語が共通語化または異方向（平板化）へ一貫した「揺れ」を示す話者でもある。

話者yhを含めこれらの話者には共通して，職業的ニーズから比較的広範なコミュニケーション網の中で様々なことばと接する機会が多かったという事実が指摘できる。さらには，もう一人の「非主流」と言える話者ks（73歳，女性，専業主婦）についても，広範なコミュニケーション網という点では上記話者と類似している。町内会長を長年勤めていた配偶者（故人）を持ち，町内会組織への参与形態（期間と規模）において他の専業主婦とは一線を画する。

一方，今回の調査から個人語の経年的推移は，必ずしも共通語化へ向けたものばかりではないことも明らかになった（横山2010）。２拍・３拍名詞におけるアクセントの平板化志向がその例である。先行研究（小野1993）によると，調査（1990年）当時，特に30代以下（1950～1955年以降の生まれ）を境に急速な東京語化，特に平板化が顕著とされている。今回の調査で特に平板化の目立つ話者については，若い世代との接触の頻度や濃度を中心としたさらに入念な話者特性の分析が求められる。

また，本調査では，中年から老年への加齢に伴う趣味（アウトドア派からインドア派へ）や社会生活上の変化（退職，配偶者の死去に伴う独居），余暇を有意義に過ごすための習い事（麻雀，民謡，社交ダンスなど）への参与とそれに付随した地元住民主体の人脈形成など，大多数の話者に共通して見られる社会生活上の変化もあった。今回，大半の話者において確認された個人語の不変性は，現段階では推測の域を出ないが，山鼻地区の老齢化や（都会的）過疎化，町内会組織や活動の衰退に伴うコミュニケーション網の縮小化や単調化などといった生活環境上の変化とどのように関わるのか，さらに系統だった分析が今後は必要とされる（cf., 池上他1977, 北海道方言研究会1978, Milroy 1980, Eckert 2000）。

５．おわりに

本稿では，2010年秋から筆者が着手している札幌市方言実時間調査より研究成果の一部を報告した。札幌市方言を対象とした先行研究（尾崎1986, 1989; 小野1991, 1993）によれば，調査当時で30歳代（現在，50歳代）話者を境に急速な東京語化の進行が確認されている[7]。今回の調査で明らかになった老年層（60・70歳代）話者の「個人語の不変性」については，共通語化への言語変化が急激に進んだとされる現在50歳代以下の世代を含めて今後さらに検証を続けるつもりである。

検証を続けるにあたり，今後取り組むべき重要課題を以下の４点にまとめて本稿を終えたい。

第一に，札幌市方言話者にとっては変化のターゲット（到達点）となるであろう共通語（東京語）自体の流動性をどう捉えるべきかである。個人語の経年的変化の認定を課題とする以上，共通語的アクセントか否かの判定基準を固定化する必要があるが，当然のことながら共通語自体も時代とともに変化し，共通語的アクセント自体も単一ではなくなっている可能性が高い。

第二に，対面インタビューで知りうる個々の話者の社会生活上の経年的推移（変化）を「社会的変数」としてどのように表現し，観

察される共通語化（または非共通語化）における個人差の解釈にどのように役立てるかである。特に，「個人語不変」の主流から逸脱する話者（outlier）の特定に関しては，妥当な統計学的手段に則った客観的手法がとられるべきである。

第三に，共通語化の程度における語彙間での差異をどのように捉えるべきかである。さしあたり，コーパス言語学などから得られる語彙頻度表との相関関係の分析を射程に入れている[8]。

最後に，今回分析対象とした名詞アクセントのみならず，動詞・形容詞についても変化の検証が必要とされる。特に形容詞アクセントの「一型化」傾向については追跡調査が強く望まれる（小野1993）。

これらを統合して，言語内的要因も含めた様々な影響因子から構成される複雑なネットワークの中で，共通語化（あるいは方言回帰），及び特定の生涯変化がどのように押し進められてきたのかといった因果関係の解明に今後も取り組んでいきたいと考えている。

謝　辞

本研究プロジェクトの遂行にあたり，被験者として本調査にご協力をいただいた山鼻住民の方々に心より感謝を申し上げたい。また，小野米一先生からは多くのご助言とご指導を頂き，この場を借り感謝の意を表したい。本調査は当初，国立国語研究所共同研究プロジェクト『接触方言学による「言語変容類型論」の構築』（代表者・朝日祥之）からの助成を受け行われ，その後，文科省科研費・基盤研究B（No. 25284082）『変異理論の新展開と日本語変異データの多角的分析』（代表者・松田謙次郎，2013～2015年度）からの助成を受け継続されている。

注

1　先行調査に参加した被験者を再調査し，前回調査以降の経年的変化を各被験者ごとに見極める方法。

2　本論考は，北海道方言研究会第192回例会（2011年４月17日）における口頭発表を基に，その後収集された分析用データを追加し，全体に加筆・修正を加えたものである。

3　各グラフで線が一本しか表示されない箇所については1990年と2010年が全く同一であることを示す。

4　こうした語彙アクセントの平板化は，近年首都圏で進行してきたとされる言語変化（荻野・山敷1983）と一致することから「共通語化」の一種と言えなくもないが，本稿では20年間の個人語の推移に焦点を当てているため，さしあたり今回は分析から除外する。

5　この点について，筆者による別論考（高野2014）で検証を行った。その結果，名詞の親密度（日常生活における馴染み度）の高さと共通語化は正比例の関係にあることが統計学的に立証された。

6　富良野市パネル調査（国研1997, 161～166頁）によると，「主人」のアクセント（D型）において，北海道方言的アクセント（○●○▽）から共通語的アクセント（●○○▽）への生涯変化を起こした話者は，世代にはそれほど関わりなく全体の約６割（67名中）とされる。一方，初回調査時（1990年）の中年層話者のみ17名を分析した本稿では，方言形から共通語形へ個人語の生涯変化が見られた話者は１名（yk69歳女性）のみであった。また，逆に共通語形から方言形へと回帰した話者はいなかった。

7　小野（1993）は，テレビの急速な普及がその一翼を担っていると指摘する。言語変化におけるテレビの役割について他の同様な指摘は，Ota & Takano（2014）でまとめられている。

8　この点についても，高野（2014）で検証されている。

参考文献

池上二良・五十嵐三郎・柴田武・岡本次郎・小野米一・大山信義・井上史雄（1977）『北海道浜ことばの共通語化に関する計量社会言語学的研究』　科学研究費　総合研究A　研究成果報告書

石垣福雄（1991）『北海道方言辞典』北海道新聞

社
井上史雄（編）（1983）『新方言と言葉の乱れに関する社会言語学的研究　～東京・首都圏・山形・北海道～』科学研究費　総合研究Ａ　研究成果報告書
荻野綱男・山敷陽子（1983）「東京における新方言」井上史雄編『＜新方言＞と＜言葉の乱れ＞に関する社会言語学的研究　昭和57年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書　17－69頁
尾崎善光（1986）「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷～名詞篇～」日本学報　第６号　67～110頁
_____.（1989）「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷～名詞篇（2）～」日本学報　第８号　１～32頁
小野米一（1981）「言語研究と北海道方言」『五十嵐三郎先生古稀記念祝賀論文集』北海道方言研究会　194～209頁
____.（1988）「北海道における新方言事象」国語の研究12
____.（1991）「札幌市方言多人数調査票について」『東日本の音声～調査票編～』日本語音声における韻律的特徴：東日本における音声の収集と研究（研究代表者　加藤正信）41～59頁
_____.（1993）「札幌市方言多人数調査資料について」『東日本の音声　論文篇（3）主要都市多人数調査（札幌市・名古屋市）報告』研究成果報告書（研究代表者　加藤正信）51～86頁
国立国語研究所（1953）『地域社会の言語生活：鶴岡における実態調査』国立国語研究所報告５　秀英出版
_____.（1965）『共通語化の過程　～北海道における親子三代のことば～』国立国語研究所報告書27
_____.（1974）『地域社会の言語生活：鶴岡における20年前との比較』国立国語研究所報告52　秀英出版
_____.（1994）『鶴岡方言の記述的研究：第３次鶴岡調査報告１』秀英出版
_____.（1997）『北海道における共通語化と言語生活の実態（中間報告）』国立国語研究所
_____.（2007）『地域社会の言語生活：鶴岡における20年間隔３回の継続調査』国立国語研究所
真田信治（1987）「ことばの変化のダイナミズム～関西圏におけるneo-dialectについて」言語生活429号
真田信治（編著）（1999）『展望　現代の方言』白帝社
_____.（2000）『脱・標準語の時代』小学館文庫
北海道方言研究会（1978）『共通語化の実態　～北海道増毛町における３地点全数調査～』北海道方言研究会叢書　第１巻
高野照司（2014）「札幌市方言の共通語化に関する実時間パネル調査　第三次報告～バリエーションを支配する「言語内的要因」に関する一考察～」北海道方言研究会40周年記念文集
横山詔一（2010）「音声共通語化の予測と検証」日本音声学会　特別講演２
横山詔一・真田治子（2010）「言語の生涯習得モデルによる共通語化予測」『日本語の研究』第６巻２号　31～44
ロング・ダニエル　中井精一　宮治弘明（編）（2001）『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界思想社
Chambers, J.K.（2009）. *Sociolinguistic Theory*（*Revised Edition*）. Oxford: Wiley-Blackwell.
Chambers, J.K., & Trudgill, P.（1998）. *Dialectology*（*Second Edition*）. Cambridge: Cambridge University Press.
Eckert, Penelope.（2000）. *Linguistic Variation as Social Practice*. Oxford: Blackwell.
Kerswill, P., & Williams, A.（2000）. Creating a New Town koine: Children and language change in Milton Keynes. *Language in Society* 29: 65-115.
Labov, William.（2006）. *The Social Stratification of English in New York City*（*Second Edition*）. Cambridge: Cambridge University Press.
Milroy, Lesley.（1980）. *Language and Social Networks*. Oxford: Blackwell.
Ota, Ichiro & Takano, Shoji.（2014）. “The media influence on language change in Japanese sociolinguistic contexts.” In J. Androutsopoulos（ed.）, *Mediatisation and Sociolinguistic Change*. Mouton de Gruyter. pp. 171-203.
Sankoff, G., & Blondeau, H.（2007）. Language change across the lifespan: /h/ in Montreal French. *Language* 83（3）: 560-88.
Trudgill, Peter.（1972）. Sex, covert prestige and linguistic change in urban British English. *Language in Society* 1: 179-195.